

凸版文久体の開発とドキュメントコミュニケーション時代の文字

田原 恭二[†]

概要： 電子メールやSNS、さまざまな告知やニュース配信やデジタルサイネージ、チケットやホテルの予約、読書や調べものなど、ウェブを中心とした情報通信技術の進展を背景として、私たちは暮らしの中でウェブを利用するようになった。と同時にディスプレイに表示されるテキストを消費している。

印刷物に印刷された文字は読者のスムーズな情報咀嚼をサポートする使命を負っており、古くは活字のころより可読性や視認性などが追求されてきたが、書体開発におけるこれらの追求は少なからず時代の技術的な制約を受けながら、対象となるメディアの機能性に応じた最適なタイプデザインの検討がくりかえされている。

現代のドキュメントコミュニケーションにおけるフォントのあり方は、デジタル化が進むこれからの環境に適応した読みやすさを考える段階になりつつあり、従来の印刷用フォント開発において配慮されてきた要点に加え、新たにデジタルデバイスでの読みやすさなどが求められると考える。

我々は将来の印刷と表示用書体の方向性を見据えた「次世代を支える書体」をコンセプトに、自社で保有するオリジナル書体を刷新し、新書体「凸版文久^{とつばんぶんきゅうたい}体」を開発した。

この凸版文久体の開発の過程においては、印刷物とは原理的に異なるフォント利用が行われるデジタルデバイスへの配慮、横組みや英数字の登場頻度が高い現代のテキストへの配慮、識字障害^{ディスレクシア}などの影響も視野に入れたヒューマンインターフェイスとしての配慮など、さまざまな課題に直面した。今回はこれらの課題と、その課題解決に向けてとった判断やアプローチ方法について報告するとともに、これからのドキュメントコミュニケーションに求められる文字や書体のあり方について考えてみたい。

[†] 凸版印刷株式会社
Toppan Printing Co., Ltd.